

タイトル	ドラッカーの記述方法について - 傍観者の視点に関する一考察 -
著者	春日, 賢; Kasuga, Satoshi
引用	北海学園大学経営論集, 21(1): 1-21
発行日	2023-06-25

ドラッカーの記述方法について

— 傍観者の視点に関する一考察 —

春 日 賢

はじめに

一般にドラッカーはユダヤ人（系）として知られる。彼とゆかりのあった知識人でも、ユダヤ人だった者は多い。主だった顔ぶれとして、義理の叔父ハンス・ケルゼンをはじめ、フロイト、シュムペーター、カール・ポランニー、ハイエク、フロム、コトラー、マズロー、マクレガーなどがある。ナチス政権誕生によって故国オーストリアを脱出した略歴など、まさにユダヤ人だからこそと想起させるに余りある。

しかしドラッカーは自らがユダヤ人であるということにほとんど言及しないまま、文筆活動を行っていた。実際、ドラッカーに慣れ親しんでいない初学者であれば、彼を非ユダヤ人と誤解してしまうであろう。ユダヤ人に言及する彼の様は、まさに自己規定「傍観者」そのものである。当事者としてではなく、あくまでも第三者として、客観的にユダヤ人を語るのである。いかに傍観者に徹するとはいえ、自らのアイデンティティの根幹をなす民族性までもその対象にするのである。実に奇異である。いや、それ以上に、これほどの徹底ぶりには、彼の深淵に並々ならぬものがあることを感じられずにはいられない。

「傍観者ドラッカー」を読み解くうえで、「ユダヤ人ドラッカー」の視点は不可避である。ひいてはドラッカー思想の全体像を読み解くうえでも、不可避なのである。本稿ではユダヤ人に関するドラッカー自身の記述を可能なかぎり跡づけ、それが難しい場合には要約しながら、その特徴を浮き彫りにしていく。

以下では、まずユダヤ人に関する記述が多くみられる初期の著作での当該部分を整理・再構成する。ここでポイントとなるのは、ユダヤ人そのものをテーマとした『ドイツのユダヤ人問題』(36)である。ついで半自伝的な回想録での当該部分を整理・再構成する。回想録では『傍観者の冒険』(=『傍観者の時代』)(79)を主たる対象に、最晩年のインタビューをまとめた『ドラッカー 二十世紀を生きて』(=『知の巨人 ドラッカー自伝』)(2005)を補足的に整理しながら、記述の特徴を明らかにしていくこととする。

I

ドラッカー初期の記述は、全体主義とりわけナチズムに対する生理的な嫌悪と根本的な拒絶、そして敵愾心をあらわにする。もとよりこの感情は、ユダヤ人全般に共通するものであろう。ドラッカーのみならず、ユダヤ人のカール・ポランニー、マンハイム、シュムペーター、ドラッ

カー、フロムら中欧ヨーロッパ系亡命知識人による諸著作が、19世紀的社会の危機がもたらした社会転換を分析しているとの指摘がある¹。ナチスによる迫害をトリガーとして、彼らユダヤ系知識人の社会に対する想いが大きく形となってあらわれたといったところであろうか。フロムは「自由論」として著名である²が、ドラッカーの「自由」そして「望ましい社会」への希求もまた、かかる時代と境遇から読み解くべきことが改めて確認される。実に全著書を通じて彼がくり返し説きおよんでいった論点のひとつは、反専制・反カリスマそしてその対極にある多元性・多様性の実現であった。

真の処女作『シュタール』(33)は、テーマたるシュタールその人がユダヤ人であった。次著『ドイツのユダヤ人問題』(36)はドラッカー唯一のまとまったユダヤ人論であるとともに、自らがユダヤ人であることを述べたうえで考察を展開しているおよそ唯一の書である。つづく初の本格的な著書『経済人の終わり』(39)では、前著のユダヤ人論を反映した考察が端的に提示されている。これら三著の系譜から、次の『産業人の未来』(42)でのわずかばかりの当該部分も読み解くことができると考えられる。以下では、これら初期の著作での記述を追っていく。

『シュタール』(33)：

フランクフルトでの記者時代、早くからドラッカーはナチスの政権獲得を予感し、その際にはドイツを脱出すべく準備していた。そのなかで自分が後戻りできないよう、反ナチスの立場を公にすべく執筆したのが本書だったという³。テーマがナチスとは対極にある政治思想家、しかもユダヤ人のシュタールだったからである。本書でドラッカーは新しい「活力ある保守主義」がもためられている今こそ、シュタールをとりあげる意義があるとする。というのも、シュタールは「ヨーロッパ史最後の偉大な保守主義者 (konservativen System)」「プロテスタントにおける唯一の保守主義者」だからだという。次のような記述がある。

すべてをまとめあげる高次元の不変秩序をもとめた「シュタールにとって、この最上位の原理は宗教的なものでなければならなかった。というのも、彼にはきわめて重要な宗教的経験があったからである。バイエルンのユダヤ人居住区で生まれた彼は、1819年に17歳でプロテスタントに改宗したのである。彼の全生涯と全学説の根底にあるのは、こうした足跡とそれゆえの義務である。」(Drucker 文献① p.5, 邦訳 102 頁。)

かくてドラッカーによれば、シュタールの学説は、プロテスタントを基礎とするがゆえの矛盾をはらむことになる。「プロテスタントの保守主義者」ということじたい、まさに矛盾している、と。このように本書では、シュタールは「ユダヤ人プロテスタント」、「プロテスタントの保守主義者」、さらに「反理性主義的」と指摘されている。これらはまさにドラッカー自身に当てはまることでもある。かくみるかぎり本書のシュタール論は、後述のフロイト論と同じく、他者を論じる体裁をとりながら、実はドラッカーが自分自身を論じているようである。そもそも反ナチスの立場を表明するテーマをユダヤ人にしたのは、著者ドラッカー自身が同じユダヤ人だったからとみるのがむしろ自然であろう。つまり自らの存在を重ねた分身すなわち「もう一人の自分」あるいは象徴として、シュタールを論じられているとみなすことができるのである。この考えは、完全に否定し切ることはできないと思われる。

『ドイツのユダヤ人問題』(36)：

既述のように、本書はドラッカー唯一のまとまったユダヤ人論である。およそ前著『シュ

タール』(33)の刊行と前後して、ヒトラーが政権をとった数週間後にドロッカーは次著にあたる『経済人の終わり』(39)を書きはじめ、1937年にはすでに完成していたという。そしてそのうち、「ナチスの反ユダヤ主義」に関する部分を小冊子として刊行したのが、本書だと位置づけられている⁴。ナチスの台頭により深刻化していくユダヤ人問題を目の当たりにして、当時のドロッカーはじっとしていられず刊行したというところであろうか。ただし本書と『経済人の終わり』(39)での「ナチスの反ユダヤ主義」に関する部分の論旨は同じであるが、まったく同じではない。もとより本書刊行時の『経済人の終わり』(39)はいまだ執筆途上にあり、完成・刊行された同書とは異なるものである。完成・刊行された同書と本書の内容は確かに大きく重複するものの、やはりそこにある違いを看過することはできない。なお確認できた範囲では、ドロッカーが本書について語ったのはおよそ上記の言のみである。後のドロッカーにおいて本書は、まず顧みられることのない書である。そして本書の大きな特徴として、次のようにドロッカーが自らをユダヤ人と認めている唯一の書ということがある。

「筆者(ドロッカー: 引用者・春日)はドイツのユダヤ人的血統として、感情的になる傾向があるにもかかわらず、国家社会主義(ナチス: 引用者・春日)の他の動向は、ユダヤ人問題に対する立場よりも、たとえばキリスト教の立場か、政治的自由への立場か、を決めるほうが重要であり、辛く感じられる。」⁵(Drucker 文献② p.1.)

内容としては、ドイツにおける人種的反ユダヤ主義(Rassenantisemitismus)の根拠を跡づけ、ナチスのユダヤ人政策を論じるものである。

まずユダヤ人問題理解のカギは、フランス革命以来のブルジョア自由主義の理念による「ユダヤ人解放」の歴史にあるとする。かかる解放によって、ユダヤ人は「ユダヤ人」としてではなく、平等の名において「人間」「市民」としてユダヤ人居住区から解放された。同時にユダヤ人はユダヤ的コミュニティと紐帯をなくしてしまったため、「もうユダヤ民族ではない」という意識のもとでブルジョア的平等をもとめて社会に相対することになる。しかし古くからキリスト教徒と対立してきたユダヤ教徒は社会的な位置づけが微妙であり、「同化」(Assimilation)の問題が生じてくる。同化は単にキリスト教へ改宗すればすむ問題ではない。国家主義の台頭によって、国内でユダヤ人は異邦人や半国民のように処遇されることもある。これはリベラリズムとリベラルなブルジョアジーがどれだけ発展しているか、その国ごとの問題となる。

ドイツは長らく統一国家がなかったため同化への圧力は他国ほど強くなく、ユダヤ人の受け皿となってきた。洗礼を受ければ職業選択の道も広がることから、改宗するユダヤ人が多くなり、彼らの子の大半がユダヤ系のキリスト教徒となった。ユダヤ人は自らのユダヤ性をある程度保持したまま、役人や大学教授、裁判官など重要な職業についたり、商売で成功したりして、ドイツ社会の中核に根づいたのである。かくてユダヤ人という存在は小さいが大きな異物となった。他国が「肌のうへの砂粒」であれば、ドイツでは「目のなかの砂粒」であった。

一方、こうしたドイツのユダヤ人には、ドイツ人であることに対する深い憧れ・愛情とそれに属していないという感情との間で悲劇的な葛藤があった。そこで彼らは、ドイツ全体の問題として国家統一に協力しようとする。第一次世界大戦はドイツ民族統一の実現にいたる決定的な国家体験にほかならず、ユダヤ人は前線で戦った。実際、他国では同大戦を経てユダヤ人問題は好転した。しかしドイツでは同大戦が逆に、ユダヤ人を民族コミュニティから完全に排除

する事態を招いた。

というのは、以下の理由による。ユダヤ人はドイツ社会の中枢に根づいたため、ワイマール共和国設立とともに彼らの存在は副次的な問題から第一の政治問題となった。それまでの指導層の崩壊によって、新たな指導層（インテリ）を担うユダヤ人の影響力が増し、彼らは新体制の発展に責任ある存在とみなされるようになった。しかし悪化するインフレと世界大恐慌の発生により、新体制の自由主義は失敗してしまい、かかる自由主義は西欧諸国からドイツに押しつけられたものでそれを担ったユダヤ人に失敗の責任があるとされてしまった。かくて反ユダヤ主義は、反共和国の手段として国家主義に利用されていく。ここにおいて反ユダヤ主義は、「人種的ユダヤ主義」として措定された。もはや非ユダヤ人と融合し判別しがたくなっているユダヤ人を区別するために、ユダヤ人を「民族」ではなく「人種」として新たに定義したのである。

しかしユダヤ人問題の根本は人種的特性ではなく、自由主義におけるユダヤ人の特別な歴史的地位にある。ユダヤ人問題の最善かつ迅速な解決のためには、自由主義の複合的全体の一部として検討する必要がある。人種理論にもとづくナチスのユダヤ人問題への取り組みは問題を解決するのではなく、問題を永遠化することを意味する。ユダヤ人問題が新たにつくりだされることによって、ナチスは権力を獲得するからである。かくてまた新たな同化問題が生じ、同化の悲劇がくり返されてしまう。反ユダヤ主義のもと、ユダヤ人に自由主義の罪を着せるのがナチスの本質であり、それは保守的かつ愛国的な多くのドイツ人が、ドイツ発展の真の悲劇と感ずるものである。純血ユダヤ人に改宗ユダヤ人や混血ユダヤ人をふくめて「非アーリア人」とすれば、すでにドイツの6～8%、インテリ・ブルジョアの25～30%を占めるにいたっている。ナチスの反ユダヤ主義は、宗教的むすびつきや個人の自由といったヨーロッパ伝統の理念・精神的諸力を拒否するだけでしかない。かくて本書は、次の言葉でむすばれている。

「今日排除されている一人ひとりにかかっていると、われわれは信じる。というのも、国家社会主義（ナチス： 訳者・春日）から精神的・道徳的存在を否定されているのは一人ひとりであり、したがって変革をもたらしのも一人ひとりだけだからである。（洗礼を受けたユダヤ人、混血者、非アーリア人と結婚した者にとって）「いまは真にドイツ人である」という心構えからのみ解決がもたらされる（彼らはユダヤ教に逃げ込めない — とりわけそのことは「いまは真にキリスト教徒である」ことを意味する — がゆえに、苦しい立場にあって戦いの重荷を抱えている人たちである）。ここにいう解決とは、精神的なドイツ統一へと、ユダヤ人を統合することである。ドイツという、偉大な過去においてヨーロッパの中核的担い手として精神的主導権を發揮した地域の精神的統一へと、ユダヤ人を統合するのである。この目標を達成するためには、いかなる犠牲も犠牲とはならない。そしてそれがわれわれの参加によって達成されるのであれば、われわれがこれまで受けてきた迫害も無駄ではなかったことになる。」（Drucker 文献② p. 24.）

先の自らをユダヤ人の血統と認めた記述をはじめとして、本書はユダヤ人としての自己を自覚して書かれている。「保守的かつ愛国的な多くのドイツ人」のひとりとして、ドラッカーは努めて客観的に、これからのユダヤ人およびドイツの行く末への建設的な提言を行っているのである。

『経済人の終わり』(39)：

本書は自他ともに認める初の本格的な著書であり、事実上の処女作である。執筆は1933年にヒトラーが政権をとった数週間後から断続的に進められ、1937年にはすでに完成していたという。以後のドラッカーにおける基本的な視点とアプローチが示されており、まさにドラッカー思想の原点とあってよい。とりわけ政治の書として反全体主義が前面にかかげられ、全体主義・ナチスという専制に抗して「自由」を守ると力強く主張されている点でみれば、彼の思想そのものが集約されているともいえる。全体主義を直接の考察対象とするがゆえに、ユダヤ人に関するまとまった記述もみられる。「第7章 奇跡か蜃気楼か」での「ナチスの反ユダヤ主義」に関する分析である。50頁ほどある本章の約20頁を占めている⁶が、これは前著『ドイツのユダヤ人問題』(36)と大きく重複するものである。当該部分は、次の印象的な言葉からはじまる。

「ナチスの人種的反ユダヤ主義とは、この悪魔の化身のもっとも徹底かつ完全な姿である。すなわち理性に背いて世界の合理性を取り戻し、ナチス社会を正当化するものである。したがってナチスの反ユダヤ主義には、大きく分析するだけの価値がある。それが、ナチスの残虐性やきわだった特徴となっているからというだけではない。全体主義革命に内在する力学と論理を、これほど明確に現わしているものはないからである。しかも、もっとも理解されていない点でもある。」(Drucker 文献③ pp.198-199, 岩根訳 152頁, 上田訳 184頁。)

「悪魔の化身」ナチスの悪魔性のみならず全体主義の行動原理が、ナチスの反ユダヤ主義に象徴されているという。かくて本章で述べられる主張の骨子は、おおよそ次のごとくとなる。戦時経済の利用によって、全体主義は「不況」「失業」という「悪魔」を追放することに成功した。そのため今度は、「戦争」という「悪魔」を正当化しつづけなければならない。そこで自らの武力行使を「聖戦」とする具体的な仮想敵すなわち別の「悪魔」が必要となる。かかる別の「悪魔」とされたのが、まさにユダヤ人なのだという。以下、この主張の具体的な記述を追ってみる。

まずドラッカーは、ナチスの反ユダヤ主義に関する通説はいずれも誤りとする。ナチス自身の説は北歐人とユダヤ人との人種的対立をとなえるが、この考え方によれば、なぜ今現在になって反ユダヤとなりうるのかが説明できない。また「常にドイツは反ユダヤ主義だった」との説については、戦前ならびにヒトラー以前のドイツの状況がまるでわかっていないものだとする。もちろん戦前のドイツでもユダヤ人に対する差別はあったが、完全な婚姻権があったため、ユダヤ人と非ユダヤ人の結婚が広く行われていた。キリスト教への改宗によって、すべての職業に就くこともできた。

その他にナチスの反ユダヤ主義を説明する見方として、経済的動機にもとづく説がある。ビジネスや専門職上で優位なユダヤ人を排除すれば、自分たちがそれにとってかわれると考えるものである。この説を否定しきることはできないが、しかしユダヤ人が排除された後の今でも反ユダヤ主義がつづいていることを勘案すれば、この考え方だけですべては説明できない。さらに、そもそもユダヤ系ドイツ人がナチズムを本能的に嫌っていることがナチスの反ユダヤ主義の原因だとする説もある。しかしユダヤ系ドイツ人は純粋ドイツ人との完全な同化を宿願としており、当てはまらない。最後に、ユダヤ人はスケープゴートにされているとの説がある。

反ユダヤ主義よりもはるかに政治的利用価値があるものが他に存在することを勘案すれば、この考え方はもっともらしいが実は無意味である。

このようにナチスの反ユダヤ主義について、通説をいずれも誤りとしたうえで、ドラッカーは自説を展開していく。彼によれば、ドイツさらにそれ以上にオーストリアの人種的反ユダヤ主義は、ブルジョア資本主義や自由主義という敵対勢力をユダヤ人に置き換えたということなのである。これはドイツのブルジョア特有の社会構造に由来する。ドイツではキリスト教ブルジョアはユダヤ人と同じく差別対象となっていたため、両者は婚姻を通じて完全に融合していくようになった。ユダヤ性（Jewry）そのものは弱体化し、あと50年か100年もすればドイツやオーストリアにユダヤ人はまったくいなくなってしまうだろう。このようにブルジョア＝ユダヤ人となったことで、「不況」「失業」そして「戦争」をもたらした「悪魔」をブルジョアよりもユダヤ人にしてしまうことがナチスにとっては合理的となった。倒すべき悪魔をユダヤ人という人種にしまえば、人種は変えようがないために標的として明確である。悪魔は常に悪魔のまま存在し、その打倒をめざすファシズムの行為は正当化されつづける。

「したがってナチスの反ユダヤ主義は、ナチス自身がいうように、北方人種とユダヤ人種の本質的矛盾によるものではない。また国外でよくいわれるように、ドイツ人固有の反ユダヤ主義によるものでもない。ドイツ系ユダヤ人と、ドイツ人の大部分を占める自由な中流階級との間に、まさに何の区別も対立も違和感もないということから生じるのである。ナチスがユダヤ人を迫害するのは、ユダヤ人がドイツ内で異質だからではない。まさにその逆で、ドイツにほぼ完全に同化してユダヤ人でなくなってしまったからなのである。」（Drucker 文献③ pp.209-210, 岩根訳 160 頁, 上田訳 193-194 頁。）

たとえば西欧のように、キリスト教ブルジョアとユダヤ人が明確に分かれているところでは、人種的反ユダヤ主義は社会的な論点とはならない。かくてドラッカーはいう。ナチスの人種的反ユダヤ主義はユダヤ人そのものの特質とは無関係であり、ユダヤ人の行動や思想を問題にするのはまったくの見当違いである、と。ナチスにとって本当の敵はブルジョア秩序であって、その排撃を人種的反ユダヤ主義の名で行っているにすぎない。ひるがえってみれば、ブルジョア秩序にかわる建設的な新秩序を提示しえないがゆえに、ナチスは反ユダヤ主義をかかげざるをえないわけでもある。自らつくりだした「悪魔」との「聖戦」をつづけることによるのみ、全体主義は自らを正当化することができるからである。ナチスにとっての反ユダヤ主義とは、まさにそういうものなのである。

1933 年以来、ナチスは次々とユダヤ人問題の「最終解決」を表明してきた。ユダヤ人にまずマイノリティの権利を与え、ついで文化活動から排除しながらも経済活動では完全な平等権を与え、退役軍人には完全な平等権を与えるなどをしてきた。今後も「最終解決」は表明されつづけるだろうが、やはりみな同じ道をたどるだろう。ナチズムによるユダヤ人問題の「最終解決」などありえないからである。というのも、悪魔の化身にして第三帝国の完全な敵として、ナチスにはユダヤ人の存在が不可欠だからである。標的とされるのが最初は「純血ユダヤ人」（full Jews）だけだったとしても、やがて「ハーフのユダヤ人」（half-Jews）、ついで「クォーターのユダヤ人」（quarter-Jews）、そして「8分の1のユダヤ人」（one-eighth Jews）というように反ユダヤ主義の範囲は拡大していく。ナチスにとって、ユダヤ人問題で本当の「最終解決」は

あってはならないことだからである。

「第7章 奇跡か蜃気楼か」での「ナチスの反ユダヤ主義」に関する考察は、およそ以上のごとくである。もとより前著『ドイツのユダヤ人問題』(36)と論旨は同じであるが、本書は全体主義・ナチスに抗し自由を守ることを目的とした政治の書である。この趣旨の違いが、ユダヤ人問題のとりあげ方の差異となってあらわれている。なお、その他で「第8章 未来；東側対西側」に、わずかばかり「ユダヤ」の文字が登場している(Drucker 文献③ pp.259-260, 岩根訳 197-199 頁, 上田訳 240-242 頁)。

『産業人の未来』(42)：

前著『経済人の終わり』(39)の問題意識を受け、全体主義・ナチスという専制に抗し自由を守るための解決の方向性を提示したのが本書である。その中核をなすのが、「社会の純粹理論」二要件である。かかる要件のひとつ、「一人ひとりに社会的な地位と役割を与えること」について、次の記述がみられる。

「一人ひとりに社会的な地位と役割があるということは、彼自身だけでなく社会にとっても重要である。一人ひとりと社会の目的・目標・行動・動機がむすびついていなければ、一人ひとり社会というものを理解できないし、また社会の中にいるとはいえない。反社会的で、社会に根がなく、社会と結びついていない個人は非合理であるばかりか危険である。破壊的で威圧的で実体のない不可解な存在である。さまよえるユダヤ人、ファウストゥス博士、ドン・ファンといった伝説の多くが、社会的な役割と地位を失ったか、自ら拒否した人間の物語なのは偶然ではない。社会的な地位と役割がないということ、社会と一人ひとりが有機的(functional)な関係にないということが、常にマイノリティ迫害の根底にある。マイノリティには誰ひとりとして社会的な地位と役割がなく、アメリカにおける黒人のように社会の一員とされなかったり、ナチス・ドイツにおけるユダヤ人のように、社会がひとつにまとまれない罪をなすりつけられたりするるのである。」(Drucker 文献④ p.30, 岩根訳 230 頁, 上田訳 27 頁。)

もとより本書でも自らがユダヤ人であるとの記述はなく、あくまでも「傍観者」としてドラッカーはこのように述べている。しかしこの記述をユダヤ人が書いたものとみれば、どうだろうか。まさに自分自身がなめた苦汁の吐露にほかならない。「社会の純粹理論」は本書のみならず、ドラッカー社会論全体の中核にあるといつてよいが、かくみるかぎりユダヤ人としての原体験の産物と考えられないこともなかろう。自らの地位と役割すなわち「居場所」をもとめつづけたユダヤ人ならではの「心の叫び」とみてとれるからである。ここに、やはりユダヤ性は「傍観者ドラッカー」の理解に不可欠と確認しうるのである。その他では、理性主義への過度の傾斜を批判した章で、次のようにも述べている。

「理性主義者には建設的な能力がなく、したがって政治的に無能であることは、かつての南部への対応にはっきりとあらわれている。この南部(アメリカの南部；引用者・春日)への対応が目立ってしまうのは、社会最大の悪たる奴隷制度を打倒したからだけではない。打倒した旧来の社会にかわる新しい社会を、南部につくってやれなかったからである。また理性主義者は

ユダヤ人居住区を解体しておきながら、ユダヤ人を社会の一員として受け入れてやれなかった。これは近代における反ユダヤ主義をもたらした重要な原因のひとつである。」(Drucker 文献④ p.142, 岩根訳 363-364 頁, 上田訳 187 頁。)

これもユダヤ人ならではの考察とみることも、あながち不当ではなからう。

II

『傍観者の冒険』(=『傍観者の時代』)(79)：

本書は、ドラッカー個人に関する主な情報源となっている書である。多くの人物が登場するが、そのなかでもユダヤ人あるいはそれと思われる者が実に多い。ユダヤ人と明記してあるのは、ヘム、ゲーニア、フロイト、カールをはじめとするポランニー一家、キッシンジャー、「小羊」シェイファーの新聞社の社長、フリードバーグ商会の面々すなわちフリードバーグ自身とモーゼル兄弟、ヘンリーおじさんである。またユダヤ人との明確な記述はないものの、内容的にそれと思われるのが、トラウン・トラウネック伯爵、女優マリア・ミュラーである。

その他に、本書での記述や内容でそうとされていないものの、ユダヤ人であることが周知の人物もいる。経済学者ミーゼスや国際法学者ハンス・ケルゼンである。ケルゼンはドラッカーの叔母(母の妹)の夫で、ドラッカーとは血の繋がりがない叔父と甥の関係にある。ケルゼン研究者の長尾龍一氏は、1988年にケルゼンの次女マリア・フェーダー女史にインタビューした時のことを、次のように語っている。長尾氏が一言、いとこのピーター(ドラッカー)の名を口にするや、マリアは本書『傍観者の時代』を徹底的に攻撃したというのである。

「…彼(ドラッカー；引用者・春日)は一方で親類に立派な人が沢山いるように読者に思わせながら、他方で自分のユダヤ性を隠そうとしているの。彼の母親と私(マリア；引用者・春日)の母が姉妹なのは知ってるわね。その実家はボンディって言って、ウィーンのユダヤ系の旧家なの。それをボンドだなんて英国風の名に変えているのよ。独逸合邦の時彼の父がナチに迫害されたのも、ユダヤ人だったからとは言わず、フリーメーソンだったからだって言っている。それに何よ、父(ケルゼン；引用者・春日)の名前を一度も出さず、『有名な法学者のハンス叔父さん』と書いている。有名なのはいいけれど、皆がユダヤ人だと知っている名前は困るんじゃないの。親類一同カンカンよ。」⁷

ここで指摘されている本書『傍観者の冒険』(=『傍観者の時代』)(79)での記述、すなわち「ボンド」は確認できなかったが、それ以外の「独逸合邦の時ピーターの父がナチに迫害されたのは、フリーメーソンだったから」(Drucker 文献⑥ p.118, 風間訳 187 頁)、「ケルゼンの名前を一度も出さず、『有名な法学者のハンス叔父さん』と書いている」(Drucker 文献⑥ p.108, 風間訳 170 頁)は確認できた。マリアのいう通りである。やはり本書でもドラッカーは自分のユダヤ性を表明しておらず、上記以外でも実に多くの箇所「自分のユダヤ性を隠そうとしている」記述、すなわち傍観者としてユダヤ人を語る記述が認められる。以下、これらに関する章⁸をみていこう。

「おばあちゃんと 20 世紀」

本章の主役、ピーター・ドラッカーのおばあちゃんはもとよりユダヤ人であるが、それに関する記述はない。間抜けで愚直な好人物として描かれているが、ここでのエピソードに彼女がナチス党員をやり込めるというものがある。1930 年代初頭ですでにナチスが大きな存在となっていた時期に、おばあちゃんはバスで乗り合わせた若者がナチスのシンボルたる鉤十字をしていることを咎めた。注意された若者は鉤十字をポケットにしまっただけでなく、降車時にはおばあちゃんに会釈までしていったという。おばあちゃんは世間知らずで無鉄砲だけれども、物事の筋を通す人間としての分別があったというのが、ここでのドラッカーのおばあちゃん評価である。しかしこのナチス党員のエピソードは、ナチスの隆盛とともに反ユダヤ主義がいや増していた時期のことだけに、当のユダヤ人による行為との含意があれば、さらに大きな意義をもったものにみえたことは間違いない。

「ヘムとゲーニア」

ポーランド系ユダヤ人夫婦「ヘムとゲーニア」が、本章の主役である。妻ゲーニアは傑出した社会活動家で女性教育者であり、盛大なサロンを主催していた。ドラッカーの両親のなれそめも彼女が運営する学校でのことであり、彼女のサロンは「ユダヤ人と非ユダヤ人 (Gentiles) が出会い、仲良く調和しながら過ごす」(Drucker 文献⑩ p.60, 風間訳 95 頁。) 場だったという。

夫ヘムは傑出した官僚として成功しながら、最後には落魄の人となった。ユダヤ人としてはじめてウィーン法曹協会の会長を務めた叔父⁹からの援助で、学生時代を過ごし官僚となった。その行動は奇矯かつ狷介で、自ら両親や一族と絶縁までした。ここにユダヤ人ヘムの「反ユダヤ主義」(anti-Jewish) に関する記述がある。ヘムは自分自身の内面的葛藤を解消するために、自ら反ユダヤ主義に転じたというのである。ヘムが経済学者デューリングを賛美してやまなかったのも、彼が激的な反ユダヤ主義だったからだという。ただしドラッカーによれば、この「反ユダヤ主義」というのはあくまでもヒトラー以前の伝統的なものであって、直接的なユダヤ人迫害に必ずしもむすびつくものではない。そして彼はいうのである。マルクス、フロイト、ベルグソン、いずれも自身にあるユダヤの遺産に背を向けることによって、それと折り合いをつけることができた、と。同様にヘムも、この「ユダヤ人の反ユダヤ主義」という屈折した感情から理解するのである。次のような記述がある。

「ヘムはまた、— マルクスとは異なり —、ユダヤ人にこれといった個人的な感情を抱いていなかった。彼の妻もユダヤ人だった。彼の唯一の親友はウィーンの銀行家 — そのほとんどはそもそもユダヤ人 — で、正統派ユダヤ教徒だった。この銀行家の息子は私 (ドラッカー；引用者・春日) の同級生だったが、学校にいる多くのユダヤ人のなかで、土曜日に読み、書き、詩の暗唱をしなかった唯一の存在であった。他の同級生にはラビの子もいたが、その子でさえ、していたのにである。そしてヘムはといえば、もちろん自分が生粋のユダヤ人以外の何ものでもないことを明らかにしていた。にもかかわらず彼は、ユダヤ人をそのブルジョア的で貪欲な合理的精神から、近代の諸悪の根源にして社会の害毒とみなしていた。ただ、彼にとってユダヤ人であるということは、民族や宗教の問題ではなく、心がまえと精神の問題だった。そして彼は、自分はとうの昔にユダヤ人から脱皮しており、完全な非ユダヤ人だと自覚していた。」(Drucker 文献⑩ pp.32-33, 風間訳 50-51 頁。)

後半部分の記述は、ユダヤ人の矛盾した内面的な感情の対立をあらわしている。ヘムは「ユダヤ人であると自認しながら、そのユダヤ人の害悪性を認識し、自分はそうしたユダヤ人ではない」とした。自己を「ユダヤ人でありながら、ユダヤ人ではない」と規定したというのである。このようにユダヤ人ドロッカーは、ヘムにユダヤ人であるがゆえの歪んだアイデンティティを認めて指摘する。ヘムはその仕事ぶりから異例の出世を果たすものの、やはり頑なな態度で自らを貫き通した。最高位の官職就任にあたって経なければならぬ形式的な宗教儀礼をも、ユダヤ人であることを盾に頑なに拒否したのである。自らの足を引っ張る自虐行為にほかならないが、これでは人間として単なる奇行を通り越してもはや支離滅裂で自己破滅的である。ドロッカーによれば、これも「ユダヤ人であること」のディレンマを表出した行動ということになる。「ユダヤ人であること」に苦しみぬいたユダヤ人の姿である。ユダヤ人ドロッカーが、ユダヤ人に「ユダヤ人であること」への屈折した感情をみているのである。

「フロイトという神話とフロイトという現実」

本章の主旨は、子供の頃にたった一度握手しただけのフロイトである。したがって回想録という内容ではなく、フロイトの学問と人に関する論考すなわち完全なフロイト論である。ドロッカーは「フロイトという神話」すなわちフロイトに関する通説3つを偽りとし、「フロイトという現実」すなわち真のフロイト像を明らかにしようとする。その際彼は「フロイト的錯誤」(a Freudian slip)というフロイト理論を用いて、そうしたフロイト本人に関する偽りを通説としたのはほかならぬフロイト自身だったとする。自らの壮大なフロイト理論を守るべく、フロイト自身こそが、かかる通説を事実として信じ込まなければならなかった張本人だといっているのである¹⁰。この偽りの通説3つのひとつ、より正確に言えば、3つすべての土台をなす大きな論点として、フロイトのユダヤ性があげられている。ユダヤ人フロイトは「反ユダヤ主義」(anti-Semitism)で差別と迫害を受けたということである。この意味で、本章のフロイト論はユダヤ人論と言い換えることもできる内容を有している。この点に関する本章でのドロッカーの主張をまとめると、およそ以下のごとくである。

実際のフロイトは晩年にヒトラーに追放されるまで、ユダヤ人として差別されることはなかった。ヒトラー以前のウィーンでは反ユダヤ主義が強くなっていた面もあるものの、社会的に高い地位にある層とりわけ医学界の要職を多数のユダヤ人が占めており、逆に反ユダヤ主義が反感的となっていた。ウィーン医学界でフロイトが冷遇されたのは反ユダヤ主義によるのではなく、逆にウィーン医学界がユダヤ的だったからである。というのも、治療代や医療そのものとのとらえ方について、フロイトはユダヤ人伝統の基本倫理に真っ向から挑戦したからである。さらにフロイトの精神分析学の存在じたいが物議を醸し、ウィーン医学界は真剣に討議を重ねたうえでそれを拒絶したからである。

「反ユダヤ主義的な差別と迫害の犠牲になっている」というフロイトの主張は、彼が直視できなかった事実を覆い隠すと同時に露呈するものでもある。その事実とは、彼はユダヤ人しか受け入れることができなかった、つまり非ユダヤ人を受け入れることができなかった、ということである。フロイト世代の中央ヨーロッパとりわけオーストリアのユダヤ人はあらゆる面で完全にドイツ人化しており、フロイトはまさにその最たる人物だった。ところがいかに非ユダヤ的なドイツ文化の大家となっても、彼は最終的に非ユダヤ人を受け入れることができず、結局

は絶縁することになってしまう。ユングなど、その典型である。こうした非ユダヤ人を拒絶してしまうという自らの事実を、彼は認めることができなかった。そこで別の理由が必要となり、「反ユダヤ主義的な差別と迫害」が登場したのである。「ユダヤ人フロイトは非ユダヤ人を受け入れられなかった」にもかかわらず、フロイトが話すときに逆に「非ユダヤ人が、ユダヤ人フロイトを受け入れられなかった」ことになってしまう。フロイトがこの「フロイト的錯誤」を必要としたのは、自らのユダヤ性から逃れることができないという「現実」が、彼自身にとっては直視することも受容することもできないほどの苦痛だったからであった。

ここでのフロイトのユダヤ性に関する考察は、先述「ヘムとゲーニア」のヘムに通じている。まさに自らのアイデンティティ「ユダヤ人であること」の葛藤に苦しむユダヤ人の姿にほかならない。ヘムほどの自己破滅的な行動でこそないものの、フロイトの作り話をやはり「ユダヤ人であること」のディレンマの表出とするのである。このヘムとフロイトに対する分析が非ユダヤ人によるものであれば、そうなかで終わるところである。しかし当のユダヤ人自身によるものとすれば、それだけですまされるものではない。どのように読むことができるだろうか。まさしく同じ葛藤に苛まれたがゆえの分析、いわばヘムとフロイトの存在を通じた、自らの苦しみの吐露とみることもできるだろう。そもそもかかる分析は、同じ葛藤に苛まれたがゆえに可能であった、同じ葛藤に苛まれることがなければできなかった。このことは、まず間違いのないといってよい。本章に関するさらに踏み込んだ指摘には、ドラッカーがフロイトと自らを重ねて論じているとするものがある。フロイトを論じながら、実はフロイトの存在を借りてドラッカーが自分自身を論じている、というのである¹¹。本章における「フロイト」という存在は、いわばドラッカーが投影した自分自身の姿ということになる。この指摘に関する立ち入った検討は後の機会に譲るが、現時点ではドラッカーを読み込んでいけばいくほど、直観的な部分で正鵠を射ているとの感覚を禁じえない。そもそも本章のフロイト論に対するドラッカーの意気込みは、本書において異質である。他章とは明らかに趣が違っている。まさにユダヤ人ドラッカーが、自らのアイデンティティ「ユダヤ人であること」の葛藤に苦しむユダヤ人の姿をまざまざとさらしているとみることもできるのである。

「ポランニー一家」

本章は、ユダヤ人の経済人類経済学者カール・ポランニー論である。その他にも、著名なポランニー一家の面々について語られているが、ユダヤ人に関する記述はポランニー一家の父親がハンガリーの山岳地帯にある小さなユダヤ人居住区出身ということのみである。個人的な交流のエピソードが多く盛り込まれており、カールに対するドラッカーの思い入れはとりわけ強かったことがうかがい知れる¹²。ただし彼のユダヤ性からくる部分にはまったく言及されていない。カール・ポランニー論じたいは、カールとドラッカー自身が「新しい社会」実現というテーマを共有していた点から論じられている。先述のように、このテーマはシュムペーターその他「中欧ヨーロッパ系(=ユダヤ系) 亡命知識人」にもみられるものでもあり、むしろかかるユダヤ性からの論考にした方がいっそう興味深かったのではないと思われる。

「怪物と子羊」

本章は1933年1月30日のナチス政権誕生によってドラッカーがドイツを脱出した前後のこ

とをあつかっており、ユダヤ人に関する生々しい描写がある。以下のごとくである。

ドイツ脱出の前日、フランクフルト大学の拡大教授会でのことである。助手のドラッカーも招集され、出席していた。与党となったナチスがこの会議を招集した意図は、ドイツでもっともリベラルで民主主義的な同大学を制圧することで、ひいては国内の全大学を掌握してしまうことにあった。それは大学側もわかっていた。同大学担当のナチ・コミッサールが新たに任命され、拡大教授会にやってきた。

「新任のナチ・コミッサールに一切の社交辞令はなかった。さっさと彼は、ユダヤ人を大学構内へ立入り禁止にすることと、3月15日をもって給与支払いなしで解雇することを告げた。いかにナチスが反ユダヤ主義を声高に叫んでいても、まさかそんなことになる誰も考えてもみなかった。そしてこのコミッサールは学者がいわれたことがないような、また兵士たちでさえいふことがはばかれるような罵詈雑言と下品な言葉を長々とまくしたてはじめた。…¹³その場にいた学者はもちろん知ってはいるが、自分たちが面と向かっていわれたことのない言葉ばかりだった。つぎにこの新しいボスは学部長を一人ひとり指さして、「お前らは、おれのいうことを聞か、収容所に入れられるか、どっちかだ」と怒鳴った。あたりがシーンと静まり返るなか、人望ある生化学者が口を開くのを誰もが期待した。この偉大な自由主義者は立ち上がり、咳払いしていった。「たいへん興味深いお話でよくわかりました、コミッサール。しかしひとつだけよくわからない点があります。生化学の研究費は増やしていただけるのでしょうか。」

コミッサールが「人種的に純粋な科学」には十分な研究費を支給すると保証して、すぐ閉会となった。ユダヤ人教授と連れ立って退出する度胸のある教授も、わずかながらいることはいた。ほとんどの教授は、ほんの数時間前まで親友だったユダヤ人教授と距離をおいて退出した。私は死ぬほど気分が悪くなった。そして48時間以内にドイツを出ると決めたのだった。」(Drucker 文献⑩ p.162, 風間訳 248-249 頁。)

ここでの描写は、まさにドラッカー自身が非ユダヤ人であるかのようである。非ユダヤ人として、ユダヤ人が迫害される様をまさしく傍観している。本当にその場にいたのであれば、ドラッカーは迫害され、教授から距離をおかれたうちのひとりのはずなのに、である。「死ぬほど気分が悪くなった」というのも、自分が差別されたユダヤ人だからではなく、人道主義的な義憤からだというのだろうか。

ともあれ、この拡大教授会がドイツ脱出の直接のトリガーとなったわけである。本章の主役のひとり「怪物」ヘンシュとのエピソードはまさにその夜のものだという。後にナチス殺人部隊副隊長となり、「怪物」と恐れられた人物である。しかしこの時はドラッカーが当時勤めていた新聞社の同僚で、とくに仕事のできるわけでもない、平平凡凡人間だった。目立った点といえば、魅力的な婚約者がいたこと、共産党とナチスふたつに所属していたことだった。早くからナチスに入っていたため、党内ではすでにそれなりの高いポジションにいた。この日、拡大教授会の後、ドラッカーが新聞社を辞めて『シュタール』(33)の校正にかかっていた時に、このヘンシュを訪れたという。

「彼(ヘンシュ；引用者・春日)は、話しはじめた。「ナチ指導部の会議で、今日の日中ほとんどをつぶしたよ。そこで、ぼくはフランクフルトの新しいナチ・コミッサール付報道顧問と

ゲネラル・アンツァイガーの党代表に任命されたんだ。それから編集者会議を開いて、ぼくが責任者になったことを知らせた。そこで君(ドロッカー； 引用者・春日)が辞めたことを知ったんだ。で、君に考え直してもらおうと立ち寄ったってわけさ。どうだろう。考え直してくれないかな。われわれに君は必要だ。もちろん社主はクビにした。フランクフルト最大の新聞の社主が、ユダヤ人であっては困るからね。そのうち編集長もクビにする。彼は左翼で妻はユダヤ人、しかも社会党議員の妹ときてる。君みたいな人間には大きなチャンスだと思うよ。ぼくは全フランクフルトの報道機関の監督で忙しくて、編集まで手が回らないんだ。」私(ドロッカー； 引用者・春日)は光栄だが、そのつもりはないと述べると、「そういうと思ってたよ。でもドロッカー、一晩寝て考えてみてよ。気が変わったら、連絡して。」と行って出ていこうとしたが、また座って5～10分ほど黙りこくっていた。」(Drucker 文献⑩ p.163, 風間訳 250-251 頁。)

このヘンシュが話している内容は、不可解である。ナチスの報道担当者として、ドロッカーとともに勤務するフランクフルター・ゲネラル・アンツァイガーの責任者になった。そして同社の社主をクビにしたが、それはこの社主がユダヤ人だからだという。そしてユダヤ人の妻をもつ編集長もクビにするというのである。一方で、ヘンシュはドロッカーを高く評価し、自分では手の回らない編集をさせる意向であることが述べられている。そしてユダヤ人のドロッカーに、「われわれに君は必要だ」とまでいうのである。一方でユダヤ人だからとクビを斬り、他方で別のユダヤ人には会社に残ってくれと頼むのである。これではまるでドロッカーが非ユダヤ人であるかのように、読者にはとらえられても致し方ない。先に引用した記述の後には、次のようにつづいている。

「それから彼はまた話しはじめた。外国に行くのなら、エリーゼ(ヘンシュの婚約者； 引用者・春日)にどこで君と連絡がとれるのか、教えてやってもいいかな。もちろん、ヒトラーが政権をとったら、ぼくは彼女との関係を断ち切らねばならなかったんだ。彼女と一緒に住んでいたアパートを引き払ってぼくは両親のところに戻ったけれど、家賃は3月いっぱいまで払い込んであるんだ。エリーゼには、一刻も早くドイツを出るようにいってある。でも彼女には外国に知り合いがないんだ。彼女がドイツを出てから君と連絡がとれるように、君の居所を教えてくださいないだろうか。」私は承知すると、彼はウィーンの私の両親の住所を書きとめた。彼は帰るそぶりをみせたが、ふたたび黙りこくってしまった。」(Drucker 文献⑩ pp.163-164, 風間訳 251 頁。)

婚約者とは「ヒトラーが政権をとったら、関係を断ち切らねばならなかった」、婚約者に「一刻も早くドイツを出るようにいっている」といっているところから、明確な記述はないものの、婚約者エリーゼはユダヤ人ではないかとも推察されうる。もとよりそうでない可能性も否定できないが。これにつづく記述では、ナチスのあまりの狂気の沙汰におそれをなしたヘンシュの本音が語られていく。なお、本章のもうひとりの主役「小羊」は、敏腕ジャーナリストのシェイファーである。彼を後継者としたドイツの有名新聞社の主がユダヤ人だったところから、それにかえるべくシェイファーがナチスに利用されたとの記述がある。

「アーネスト・フリードバーグの世界」「銀行家と愛人」

「アーネスト・フリードバーグの世界」「銀行家と愛人」とつづく2章は、マーチャント・バンク「フリードバーグ商会」でのことをつづっている。ドイツ脱出後の在英時代に3年間勤務した職場だったが、ドラッカーによれば、そこで出会ったのは興味深い人々ばかりだったという。実にそのほとんどがユダヤ人である。金融業がユダヤ人に多い職業ということもあるだろう。まず同商会の共同経営者3名、すなわち創業者の70代後半のフリードバーグ、30代のリチャードとロバートのモーゼル兄弟である。同商会の実働部隊だったモーゼル兄弟についてはフリードバーグが期待する有能な人材であったこと、「銀行家と愛人」で同商会を通じた弟ロバートと愛人の様が描かれ、一言ユダヤ人であったと述べられている。同商会の象徴フリードバーグは実家が代々「宮廷ユダヤ」(Court Jews)つまりプライベート・バンカーで、自ら銀行業者であることを誇りとしていた。「投機」という言葉を嫌っていたものの、実際には銀行家というよりもトレーダーであって「取引」を生きがいとしていたという。また在英ユダヤ人の統括機関「ユダヤ人保護委員会」(the Jewish Board of Guardians)の会計係を30年以上勤めていたとも述べられている。ドラッカーはこのフリードバーグに目をかけられ、銀行家としての将来を嘱望されていたように描かれている。実際フリードバーグは、銀行家として観察するに値する人物をドラッカーに会わせてくれた。そのひとりに通称「ヘンリーおじさん」がいる。フリードバーグと同郷でユダヤ人居住区の貧しい肉屋の子として生まれながら、アメリカ流通業界の革命児となった立志伝中の人であった。このように「フリードバーグ商会」に関する2章は、ユダヤ的なもので満ちている。ただ、ここでのドラッカーは総じてそれらのものを19世紀の消えゆくものとしてみているだけで、ユダヤ性については言及していない。

「ほのぼのとしたお人好し」:

最終章たる本章は、主にドラッカーが渡米した1937年から太平洋戦争勃発の1941年頃をあつかっている。当時アメリカは、ニュー・ディール期にあった。タイトル「ほのぼのとしたお人好し」(The Indian Summer of Innocence)が意図するのは危機に瀕した際の人と人の絆であり、そこからドラッカーはアメリカにおける人とコミュニティ・社会のあり方を論じている。大不況にあったニュー・ディール期のアメリカは人助けに熱心で、他人の成功を自分の成功とみなす思いやりに満ちた時代だった。コミュニティ・社会は、健全で活力にあふれていた。こうしたコミュニティ・社会の称揚は、しかし反面で部族主義や差別をも強化してしまった。ここでドラッカーは黒人問題とともに、ユダヤ人についても語っている。大不況期のアメリカは1920年代以上に反ユダヤ的、反カトリック的になるとともに、同じく親ユダヤ的、親カトリック的ともなった。ユダヤ人内部ではドイツ系とロシア系の亀裂が広がり、同様のことはカトリック内部や、北部と南部というアメリカ全体でも起こった。まさに職業や階級によるむすびつきよりも、出身や民族、宗教などのむすびつきの方が重要だった結果である。ドラッカーは次のように記している。

「これは、ヨーロッパからの新参者にはまったく戸惑うことだった。いや、むしろはじめは単純なようでいて、そのうち訳がわからなくなってしまうのである。ユダヤ人の立入りを「制限する」リゾートやカントリークラブを知った時、「直接的な反ユダヤ主義」だと思った。もちろんそれは、実際にはあらゆる大学で行われているユダヤ人学生の「割当」とか、ほとんど

の大学で表立ってはいないものの現に存在する、ユダヤ人教員への差別と同じである。ニューヨーク大学のチャンセラー・チェイスは、大恐慌のさなかに予算の均衡を維持すべく、全教員の給与40パーセントのカットを断行した。ユダヤ人教員については70パーセントのカットを告げ、「いやなら、辞めてもらう。でもユダヤ人の身で、他に仕事が見つかるかね。」と言いつつ放った。それから20年後、私（ドロッカー；引用者・春日）は同大学の主要学部で学部長となったが、チェイス自慢のこの「賢明な措置」の名残りにじっと耐えねばならなかった。それでも彼は、教育界では自他ともに認める「リベラル」の先鋒だった。実際彼は、公式にはいまだメソジスト派だった同大学理事会の強硬な反対があったにもかかわらず、ユダヤ人教員を一切の差別も割当制限もなく雇用することを実現しており、この点で同大学が先導的な役割を果たしていることを自負していた。

カレッジや大学のなかには、ユダヤ人学生に対して厳密な「割当」を実施してアメリカ系ユダヤ人を学部から排除する一方で、ドイツやオーストリアからのユダヤ人学者に対して例外なく胸襟を開いて資金と学部を提供しているところもある。コミュニティのなかには、ユダヤ人のクラブやリゾートへの立入り、アパートへの入居を「制限」するなど排他的でありながら、最低ひとつの有力な公職——たとえば市の監査役や検事総長——には、どの党派もユダヤ人候補を立てるべきだと主張するところもある。「立入り制限」というのも、ニューヨークやボストン、ワシントン、ロサンゼルスでは「ユダヤ人禁止」を意味したのに対し、ミネアポリスでは「カトリック禁止」、ピッツバーグでは「ハンガリー人、スロバキア人、ポーランド人禁止」を意味した。

当時アメリカ人がみな、とはいえ、なかでもヨーロッパからの新参者が、反ユダヤ的なレトリックや習慣、政策にしないで敏感になっていった。しかし、それ以上にアメリカのカトリックは、差別する側とされる側という差別の両面性、すなわち部族社会の差別に相対していた。」(Drucker 文献⑩ pp.303-304, 風間訳 470-471 頁。)

つづけてドロッカーは百貨店、大学、法律事務所、会計事務所、さらに GM やシアーズ・ローバックといった具体的な名前をあげながら、ユダヤ、カトリック、プロテスタントが錯綜する組織内の差別とそれをまとめあげる微妙なバランスを指摘する。そしてさらに次のように記している。

「かつて私はユダヤ人の友人に訊いたことがある。「ニューヨークの法律事務所はユダヤ系と非ユダヤ系があるけど、なぜザリバン&クロムウェルにふたりのユダヤ人⁴共同経営者がいるの?」「でも彼らはドイツ系ユダヤ人で、ロシア系じゃない。」というのが彼の答えだった。別の友人がリーマン・ブラザーズの共同経営者になった時には、「彼はロシア系ユダヤ人とはいえない。一族はハンガリー出身だから。」という話を耳にした。このユダヤ人同士内での違いは、ヒトラーの存在があったにもかかわらず、年配者世代では戦後までつづいた。ベニントン大での私の教え子のなかに、ニューヨークの著名な外科医の娘がいた。ドイツ系ユダヤの名門の出だった。父親の病院の内科医と恋仲で、その彼をベニントンに連れてきて未来の夫だと私に紹介した。大変な好青年だった。彼女の父親は人間として非の打ちどころのない人格者だったにもかかわらず、ふたりの仲を引き裂きたいので手伝ってほしいと私にいつてきた。驚いて「どうして?」と訊くと、「ロシア系ユダヤ人だから」という(結局どうにかふたりの仲を引き裂く

ことはできたが、その反動で彼女は財産目当てのやくざな男と結婚してしまった。ニューヨークのハーモニー・クラブが創設されたのは、J.P. モルガンがユニオン・リーグ・クラブへのユダヤ人の入会を拒否したからである。しかし逆に、ハーモニー・クラブは非ドイツ系つまり「ロシア系」ユダヤ人の入会を、第二次大戦後も長らく認めようとしなかった。」(Drucker 文献⑩ p.305, 風間訳 473-474 頁。)

以上の記述をふり返っておこう。人と人の絆が強く、コミュニティ・社会が健全で活力にあふれていた時代、反面で部族主義も強まって、差別・逆差別が入り乱れた状況がつづられている。ユダヤ人については、一定の保護がなくもなかったが、やはり差別の大きな対象であったこと、さらに同胞ユダヤ人内部でも差別・逆差別があったこと、が記されている。しかしここでも当のドラッカーは自分が非ユダヤ人のごとき記述に徹している。

それをもっとも象徴しているのは、「かつて私はユダヤ人の友人に訊いたことがある。「ニューヨークの法律事務所はユダヤ系と非ユダヤ系があるけど、なぜサリバン&クロムウェルにふたりのユダヤ人共同経営者がいるの?」「でも彼らはドイツ系ユダヤ人で、ロシア系じゃない。」というのが彼の答えだった。」である。明らかに自分が非ユダヤ人だと読者に印象づける記述である。ユダヤ人が「ユダヤ人の友人に訊いた」と記さないこともないだろうが、常識的に考えれば、あえてそのようなことは記さないだろう。これは不自然さを通り越して、作作的である。

また微妙な記述のところもある。「ニューヨーク大学のチェイスが、全教員の給与40パーセントのカット、ユダヤ人教員については70パーセントのカットを断行した。それから20年後、私は同大学の主要学部の長となったが、チェイス自慢のこの「賢明な措置」の名残りにじっと耐えねばならなかった。」というくだりでは、ドラッカーが「じっと耐えねばならなかった」「賢明な措置」の名残り」が、「全教員の給与40パーセントのカット」なのか、「ユダヤ人教員の給与70パーセントのカット」なのは判然としない。もとよりドラッカーがユダヤ人であると知っていれば、後者と読むのが自然であろう。

本書『傍観者の冒険』(=『傍観者の時代』)(79)には何かと問題が多いが、看過しえない資料であることは間違いない。ドラッカーの深層心理が無意識に顔を出しているような部分が散見されるといってもいい。本章で彼は、アメリカそしてアメリカ人を次のように規定している。難を逃れて故国を離れた者にとってアメリカは「最後にして最良の希望」であり、そこにたどり着いた者たちは「アメリカ的信条」の実現すなわち「政治」を通して「生粋のアメリカ人」になった、と。この言葉は、人種・民族・宗教の違いを超えて、ユダヤ人ドラッカー自らも「生粋のアメリカ人」になったのだといっているように聞こえてならない。

III

『ドラッカー 二十世紀を生きて』(2005) (=『知の巨人ドラッカー自伝』(2009)) :

本書は、2005年2月に日本経済新聞で連載されたコラムを著書化・文庫化したものである。記者・牧野洋氏が2004年の9月頃に行ったドラッカーへのインタビューをベースに、「私の履歴書」のタイトルで27回にわたって連載された。インタビューじたいは、ドラッカー永眠のおよそ1年前のことである。全27章で章末に訳者解説のコラムが付されており、読みやすく

わかりやすい。『傍観者の冒険』(=『傍観者の時代』)(79)と重複する部分も多いものの、新たなエピソードも盛り込まれている。それらの真偽のほどはさておくとしても、ドラッカーの個人史を知るうえでやはり看過しえない貴重な資料である。『傍観者の冒険』の記述との整合性・補完性に関する検証は後の機会に譲り、ここでもやはりユダヤ人についての記述を追ってみる。

ドラッカーの両親が週に数回の割合でホームパーティーを開いていたとのエピソードがある(Drucker 文献③0 42 頁)。その常連客にはシュムペーターやハイエクがあげられている。非ユダヤ人もいるものの、基本的にユダヤ人コミュニティを中心としたものであったと考えられるところである。およそドラッカーがもっとも影響を受けた経済学者がシュムペーターなのは有名である。ドラッカーの父が彼に救いの手を差し伸べたこと(Drucker 文献③0 35-36 頁)、また父とともに彼の死の直前に訪問したこと(Drucker 文献③0 181 頁)など、父の親しい友人として語られている¹⁵。その他に「両親の親友が開くサロンにも入り浸った」とし、トマス・マンの失敗談を語っているところから、このサロンとは先述のユダヤ人ゲーニアのものと考えられる。

『傍観者の冒険』(=『傍観者の時代』)(79)の「怪物と子羊」でのエピソードについて、本書では「10 ナチス突撃隊 — 心臓が止まる思い」で次のように語っている。

ドイツ脱出が決定的になったのは、「ナチスが政権を掌握してから数週間後、私が助手として籍を置いていたフランクフルト大学に早くもナチスが乗り込んできて、とんでもなく胸くその悪い思いをさせられたからだ。…ナチスが反ユダヤ主義を唱えていても、実際にはそんなことはできない、とだれもが思っていた。それはとんだ見当違いだったわけだ。ついさっきまで親友同士だったのに、教員の大半がユダヤ人と距離を置いて退出するのを見て、四十八時間以内に今度こそドイツを出ると決心した。」(Drucker 文献③0 77-78 頁。)

夜自宅にナチス突撃隊の制服を着た男の来訪があった。その男は同じ新聞社のさえない編集者だった。「うちの新聞社の党代表にぼくが任命されたんだ。ユダヤ人の社主もクビにするし、左翼でユダヤ人を妻にする編集長もクビにする。君みたいな男にはぜひ残ってもらいたいと思っただけ。」(Drucker 文献③0 79 頁。)

『傍観者の冒険』(=『傍観者の時代』)(79)とまったく同じ書き方、すなわちドラッカー自身は非ユダヤ人であるかのような記述である。とりわけヘンシュと思われるナチス突撃隊員からの要請は、文章が短縮されているがゆえに、矛盾がより明確に伝わってくる。ユダヤ人だからという理由でクビにするといっておきながら、ユダヤ人ドラッカーにはぜひ残ってほしいというのである。この書き方では、自らのユダヤ性を秘匿するということを超えて、非ユダヤ人であるとの虚偽を語っているととられても致し方ないと思われる¹⁶。

本書ではドラッカーの父親がナチスにねらわれた理由は、リベラル派だからとされている(Drucker 文献③0 95 頁。)。既述のマリア・フェーダー女史がいうように、ユダヤ人だからとはされていない。その他、仕事仲間や友人として、著名なユダヤ人が登場している。確認できる範囲では、品質管理の大家エドワード・デミングとジョセフ・ジュラン、エーリッヒ・フロム、インテルの共同創業者アンドリュー・グローブ、ジャック・ウェルチをあげることができる¹⁷。

おわりに

以上、ユダヤ人に関する記述を整理し再構成してきた。基本的な考察は『ドイツのユダヤ人問題』(36)で提示され、それをナチスの反ユダヤ主義としてまとめたのが『経済人の終わり』(39)であった。同書でいわれる当の「純粋ドイツ人との完全な同化を宿願としていたユダヤ系ドイツ人」だったドラッカーならではの分析であり、考察といってよい。ただし、その記述は『ドイツのユダヤ人問題』を唯一の例外として、以降の著書では自らがユダヤ人か否かということをお問わない第三者的な視点「傍観者」であった。

このように、ユダヤ人を語るユダヤ人ドラッカーはおよそ「傍観者」に徹していることが確認できた。と同時に、「傍観者」というだけではすまされない記述も明らかになった。違和感や不自然を超えて、作為的さらには虚偽といわれても致し方ない記述である。回想録の類の記述については、あくまでも個人の記憶によるものであるから、事実関係の誤認があることは致し方ないとしても、明らかにそれですまされる範囲を超えている。これでは、意図的に事実を歪めているといわれても仕方なかろう。ドラッカーの虚偽性はすでに指摘されているところであるが⁸、本稿での作業をみるかぎり、少なからず首肯せざるをえない。この点に関するさらなる考察は、稿を改めて行うこととしたい。

またユダヤ性への論述ということでみれば、フロイト、ヘムらではユダヤ人であるがゆえの内面的葛藤が説きおよばれている。それを書いたドラッカーがユダヤ人だとすれば、自らもそうした内面的葛藤に通じていた、そうした苦しみを経験していたと考えるのはむしろ自然である。つまり、これらの論述はいずれも他者を論じる体裁をとりながら、実は誰よりもドラッカーが自分自身を語っているとも考えられる。彼ら他者の存在を借りて、ドラッカーは自らの人格的なあり様を吐露しているのである。かくみるかぎりにおいて、ドラッカー思想の根幹さらにはアイデンティティにユダヤ性がまぎれもなく存在していることが確認できるのである。

参考文献

- Doris Drucker, *Until I Met You* (96) (野中ともよ訳『あなたにめぐり逢うまで』(97) 清流出版)
 J. A. Krames, *Inside Drucker's Brain*, Portfolio, 2008. (有賀裕子訳(2009)『ドラッカーへの旅』ソフトバンク クリエイティブ)
 R. Wartzman, *Drucker: A Life in Pictures*, 2013.
 東谷暁『経済学者の栄光と敗北』朝日新書, 2013年。
 磯秀雄『ピーター・ドラッカー研究序説 生きながらの死者の肖像』水山産業出版部, 2011年。
 栗本慎一郎『ブタベスト物語』晶文社, 1982年。
 長尾龍一『ケルゼン研究』『されど、アメリカ』信山社, 1999年。
 若森みどり『カール・ポランニー』NTT出版, 2011年。

Drucker 文献

- ① *Friedrich Julius Stahl; Konservative Staatslehre und Geschichtliche Entwicklung. Tuebingen: Mohr.* (33) (原題『フリードリヒ・ユリウス・シュタール； 保守的国家論と歴史の発展』(DIMMOND ハーバード・ビジネス・レビュー編集部訳『フリードリヒ・ユリウス・シュタール； 保守的国家論と歴史の発展』所収は『DIMMOND ハーバード・ビジネス・レビュー』第34巻第12号, ダイヤモンド社, 2009年。)
- ② *Die Judenfrage in Deutschland.* (36) (『ドイツのユダヤ人問題』)
- ③ *The End Economic Man; The Origins of Totalitarianism.* (39) (原題『経済人の終わり； 全体主義の起源』)(岩

ドラッカーの記述方法について(春日)

- 根忠訳『経済人の終わり』所収は『ドラッカー全集』第1巻, ダイヤモンド社, 1972年。上田惇生訳『経済人の終わり』ダイヤモンド社, 2007年。)
- ④ *The Future of Industrial Man; A Conservative Approach.* (42) (原題『産業人の未来; ある保守主義的アプローチ』)(岩根忠訳『産業にたずさわる人の未来』所収は『ドラッカー全集』第1巻, ダイヤモンド社, 1972年。上田惇生訳『産業人の未来』ダイヤモンド社, 2008年。)
 - ⑤ *Concept of the Corporation.* (46) (原題『会社の概念』)(岩根忠訳『会社という概念』所収は『ドラッカー全集』第1巻, ダイヤモンド社, 1972年。なお同書は, 上田惇生訳による邦訳タイトル『企業とは何か』として一般に受容されている。)
 - ⑥ *New Society; Anatomy of Industrial Order.* (50) (原題『新しい社会; 産業秩序の解剖』)(村上恒夫訳『新しい社会と新しい経営』所収は『ドラッカー全集』第2巻, ダイヤモンド社, 1972年。)
 - ⑦ *The Practice of Management.* (54) (原題『マネジメントの実践』)(上田惇生訳『現代の経営』上巻・下巻, ダイヤモンド社, 1996年。)
 - ⑧ *America's Next Twenty Years.* (56) (原題『アメリカのこれからの20年』)(中島・涌田訳『オートメーションと新しい社会』所収は『ドラッカー全集』第5巻, ダイヤモンド社, 1972年。)
 - ⑨ *The Landmarks of Tomorrow.* (57) (原題『明日への道しるべ』)(現代経営研究会訳『変貌する産業社会』所収は『ドラッカー全集』第2巻, ダイヤモンド社, 1972年。)
 - ⑩ *Gedanken für die Zukunft.* (59) (原題『明日のための思想』)(清水敏充訳『明日のための思想』所収は『ドラッカー全集』第3巻, ダイヤモンド社, 1972年。)
 - ⑪ *Managing for Results; Economic Tasks and Risk-taking Decisions.* (64) (原題『成果をあげる経営; 経済的課題とリスクをとる意思決定』)(野田・村上訳『創造する経営者』所収は『ドラッカー全集』第4巻, ダイヤモンド社, 1972年。)
 - ⑫ *The Effective Executive.* (66) (原題『有能なエグゼクティブ』)(野田・川村訳『経営者の条件』所収は『ドラッカー全集』第5巻, ダイヤモンド社, 1972年。)
 - ⑬ *The Age of Discontinuity; Guidelines To Our Changing Order.* (68) (原題『断絶の時代; われわれの変わりゆく秩序への指針』)(林雄二郎訳『断絶の時代』ダイヤモンド社, 1969年。)
 - ⑭ *Management; Tasks, Responsibilities, and Practices.* (73) (原題『マネジメント; 課題, 責任, 実践』)(野田・村上監訳『マネジメント』上巻・下巻, ダイヤモンド社, 1974年。)
 - ⑮ *The Unseen Revolution.* (→ *The Pension Fund Revolution.*) (76) (原題『見えざる革命』→『年金基金革命』)(上田惇生訳『見えざる革命』ダイヤモンド社, 1996年。)
 - ⑯ *Adventures of a Bystander.* (79) (原題『傍観者の冒険』)(風間禎三郎訳『傍観者の時代 — わが20世紀の光と影』ダイヤモンド社, 1979年。上田惇生訳『傍観者の時代』ダイヤモンド社, 2008年。)
 - ⑰ *Managing in Turbulent Times.* (80) (原題『乱気流時代の経営』)(上田惇生訳『乱気流時代の経営』ダイヤモンド社, 1996年。)
 - ⑱ *The Changing World of the Executive.* (82) (原題『変貌するエグゼクティブの世界』)(久野・佐々木・上田訳『変貌する経営者の世界』ダイヤモンド社, 1982年。)
 - ⑲ *Innovation and Entrepreneurship.* (85) (原題『イノベーションと企業家精神』)(小林宏治監訳『イノベーションと企業家精神』ダイヤモンド社, 1985年。)
 - ⑳ *The Frontiers of Management.* (86) (原題『マネジメントのフロンティア』)(上田・佐々木訳『マネジメント・フロンティア』ダイヤモンド社, 1986年。)
 - ㉑ *The New Realities.* (89) (原題『新しい現実』)(上田・佐々木訳『新しい現実』ダイヤモンド社, 1989年。)
 - ㉒ *Managing the Non-Profit Organization.* (90) (原題『非営利組織の経営』)(上田・田代訳『非営利組織の経営』ダイヤモンド社, 1991年。)
 - ㉓ *Managing for the Future.* (92) (原題『未来への経営』)(上田・佐々木・田代訳『未来企業』ダイヤモンド社, 1992年。)
 - ㉔ *The Ecological Vision.* (93) (原題『生態学のビジョン』)(上田・佐々木・林・田代訳『すでに起こった未来』ダイヤモンド社, 1994年。)
 - ㉕ *Post-Capitalist Society.* (93) (原題『ポスト資本主義社会』)(上田・佐々木・田代訳『ポスト資本主義社会』ダイヤモンド社, 1993年。)
 - ㉖ *Managing in a Time of Great Change.* (95) (原題『大変革期の経営』)(上田・佐々木・林・田代訳『未来への

決断』ダイヤモンド社、1995 年。）

- ⑳ *Drucker on Asia*. (97) (原題『ドロッカー、アジアを語る』) (上田惇生訳『P. F. ドロッカー・中内功 往復書簡① 挑戦の時』P. F. ドロッカー・中内功 往復書簡② 創生の時』ダイヤモンド社、1995 年。)
- ㉑ *Management Challenges for the 21st Century*. (99) (原題『21 世紀に向けたマネジメントの課題』) (上田惇生訳『明日を支配するもの』ダイヤモンド社、1999 年。)
- ㉒ *Managing in the Next Society*. (2002) (原題『ネクスト・ソサエティの経営』) (上田惇生訳『ネクスト・ソサイエティ』ダイヤモンド社、2002 年。)
- ㉓ 『ドロッカー 二十世紀を生きて』(牧野洋訳、日本経済新聞社、2005 年 → 『知の巨人ドロッカー自伝』日本経済新聞社、2009 年として文庫化)
- ㉔ 『ドロッカー全集』全 5 巻、ダイヤモンド社、1972 年。
- 第 1 巻 産業社会編 — 経済人から産業人へ
 第 2 巻 産業文明編 — 新しい世界観の展開
 第 3 巻 産業思想編 — 知識社会の構想
 第 4 巻 経営思想編 — 技術革新時代の経営
 第 5 巻 経営哲学編 — 経営者の課題

1 具体的には、カール・ポランニー『大転換』(44)、マンハイム『変革期における人間と社会』(35)、シュムペーター『資本主義・社会主義・民主主義』(42)、ドロッカー『経済人の終わり』(39)と『産業人の未来』(42)、フロム『自由からの逃走』(41)らがあげられている。若森みどり『カール・ポランニー』NTT 出版、2011 年、128-129 頁。

2 彼らとは境遇が違うが、やはりユダヤ人でドロッカーと同年のアイザイア・バーリンが後にかの『自由論』(69)を著わしていることも興味深い。

3 『傍観者の冒険』(=『傍観者の時代』) (79) での記述による。実際には次のように記されている。

「また私は決意して、もうぐずぐずしてはられないようにすることにした。友人のペートルトと語り明かした翌日、私は本を書きはじめた。ナチスが私に、そして私もナチスにかかわることができなくなる本である。パンフレット程度の小著であった。ドイツ唯一の保守的政治哲学者、フリードリッヒ・ユリウス・シュタールをテーマとするものである。シュタールは、ビスマルク以前のプロイセンの傑出した政治家で保守党議員であり、法の下での自由をとる哲学者であり、ベルリン大学におけるヘーゲル哲学の後継教授であると同時に、ヘーゲル哲学に反発する運動のリーダーでもあった。そしてシュタールはユダヤ人だった！(And Stahl had been a Jew!) 保守主義と愛国主義の名において、激動の 1930 年代の模範や学ぶべき師として、シュタールをあつかう論文を公表することは、ナチスへの正面攻撃を表していた。」(Drucker 文献⑩ p.160, 風間訳 246 頁。； なお本書の邦訳には上田惇生訳『傍観者の時代』(ダイヤモンド社、2008 年) などがあるが、省略箇所が多すぎるため、本稿では風間訳のみを表記する。)

その他、『生態学のビジョン』(=『すでに起こった未来』) (93) のあとがき「ある社会生態学者の回想」では、およそ次のように述べている。1930 年代初頭のフランクフルトでの記者時代、ドロッカーは社会の崩壊を感じた。そこから、かつて法治国家の発明によって社会を安定させたドイツの偉大な思想家 3 人に目を向けるようになった。この 3 人と彼らの法治国家に関する本こそ、本来であれば書くべきでありながら書けなかった本、少なくとも完成させられなかった最初の本である。できたことといえば、3 人のうちのひとり、改宗したユダヤ人シュタールに関する小冊子を出版したことだけだった (Drucker 文献⑭ pp.443-445, 邦訳書 301-305 頁)。

4 Drucker 文献③上田訳 283 頁 (1995 年版へのまえがき)。

5 他方でドロッカーは、次のように述べたことが記録されている。「私は、たまたまユダヤ人ではなかったのです (I happen not to be Jewish)。ユダヤの家系ではありますが、何代かさかのぼればの話です。」(2003 年時のインタビュー。所収は Krames *Inside Drucker's Brain*, Portfolio p.28, 有賀裕子訳『ドロッカーへの旅』(2009) ソフトバンク クリエイティブ 44 頁。) その他の資料としては、R. Wartzman, *Drucker: A Life in Pictures*, 2013, p.7 を参照されたい。

6 Drucker 文献③ pp.198-218, 岩根訳 152-167 頁, 上田訳 184-202 頁。

7 長尾龍一『されどアメリカ』(信山社、1999 年) 165-166 頁。これにつづけて長尾氏は「なるほど、知識人の世界で多大の支配力をもつように見えるアメリカのユダヤ人も、なおユダヤ性を隠そうとするのかと、ア

メロ社会の一面をみた思いがした。」と述べている。

ちなみにドロッカーが渡米した当時のアメリカのアカデミズムにおけるユダヤ人の状況については、手軽なものとして東谷暁『経済学者の栄光と敗北』（朝日新書、2013年）111-113頁を参照されたい。

⁸ 本書は「プロローグ：ひとりの傍観者が生まれた」の後、三部構成の本論で「アトランティスからの報告」「旧世界での若者」「無邪気な小春日和」となっている。原著では、部・章・節の区切りは付されておらず、序数の表記もない。それぞれの部のなかで章のようなもののタイトルがあるだけである。本稿での表記はそれに忠実にならっていることをあらかじめお断りしておく。ただし、対象としてとりあげる場合には、「本章」と述べることにする。

⁹ おそらくハンス・ケルゼンのことをさすと思われる。

¹⁰ 本章のフロイト論については、まず確認しておくべきことがある。ドロッカーは両親や知人を通じて比較的身近な存在だったフロイトについて、それなりに見聞きした事実もあったようである。とはいえ、個人の内面的な心理を論じている点で、そもそも本章のフロイト論はあくまでも憶測の域を出ないということである。それが精神分析学の手法なのかもしれないが、もとよりドロッカーはその方面の専門家ではない。フロイト本人も自覚しなかった内面的な一部分を明らかにしたといえるかもしれないが、結局は非専門家たるドロッカーによるフロイトの読み方のひとつにすぎない。この点が、本章を語るうえでの出発点となる。

¹¹ 磯秀雄『ピーター・ドロッカー研究序説 生きながらの死者の肖像』水山産業出版部、2011年。

¹² このエピソードについては、栗本慎一郎『ブダペスト物語』（晶文社、1982年）を参照のこと。

¹³ 当該部分は原著書で確認されたい。Drucker 文献^⑩ p.162。風間訳 249頁でも訳されている。

¹⁴ 原書では two Seligman という名前となっているが、Seligman はユダヤ人とわかる名前である。内容的にユダヤ人ということさをさして用いたことは明らかなため、「ユダヤ人」と訳出した。風間訳でも、同様にあつてはいる。

¹⁵ シュムペーターとのエピソードは、Drucker 文献^⑪ pp.109-110、邦訳書『P.F. ドロッカー・中内功 往復書簡② 創生の時』46-49頁で「第7の経験 シュムペーターの教え」として語られているが、ユダヤ性についてはまったくふれられていない。

¹⁶ この「10 ナチス突撃隊 — 心臓が止まる思い」の章末に付された訳者解説のコラムは、「ユダヤ人」である。ここではドロッカー自身の言葉も引用しながら、次のように述べられている。

「ナチスが掲げる反ユダヤ主義がドロッカーにとって許しがたい行為だったのは、フランクフルトでもウィーンでも、周辺には常にユダヤ人が大勢いたし、その多くが友人だったことが背景にあるようだ。

『経済人の終わり』によれば、当時のウィーンでは、事業家や銀行家、弁護士、医者などのブルジョア階級でユダヤ人は全体の四分之三を占めていたようだ。例えば、ドロッカー家と付き合いがあった精神分析の父、ジークムント・フロイトもユダヤ人だ。

ユダヤ人とはいっても純粋なユダヤ人だけを指しているのではない。多くのユダヤ人は、キリスト教への改宗やキリスト教徒との結婚などを通じて、オーストリアを含めたドイツ文化圏へ同化していた。ライン川流域では、ユダヤ人がドイツ人と同じくらい古い昔のローマ時代から住み着いていたことを考えれば当然なのだろう。」(Drucker 文献^⑫ 80-82頁。)

ここでいわれる「多くのユダヤ人は、キリスト教への改宗やキリスト教徒との結婚などを通じて、オーストリアを含めたドイツ文化圏へ同化していた」は、ドロッカー家そしてドロッカー自身にも当てはまることにほかならない。しかし引用箇所全体をみるかぎり、この訳者解説のコラムはドロッカーを非ユダヤ人としてあつかっているようである。

¹⁷ ちなみにドロッカーの妻ドリスも、ユダヤ人である。彼女の *Until I Met You* (96) (野中ともよ訳『あなたにめぐり逢うまで』(97) 清流出版) はドロッカーとの結婚にいたるまでを描いた半自伝であるが、夫と同じく自らがユダヤ人であると言明しない既述の仕方となっている(邦訳書 15-16頁, 98-99頁, 252頁などを参照されたい)。しかし同書にはドリスの家系図(8頁)が収められており、彼女の旧姓シュミッツ家をはじめとして、その祖先ランシュタイン家、モロ・オッペンハイマー家と、いずれもユダヤ系であることが明白である。

¹⁸ 磯秀雄、前掲書。

